初篇　二十三

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

年立かへる朝は霞の色も春めきて
ゆきわたりけるに梅かえのわか枝のうら
らに雪間の草わかやかに色付そめて
そとも乃川霧ほのかにして松乃
つくる人の心におのつから見ゆめりて
うち君のたる人の庭にうつりて見えわたり
はる見ゆる霞にかすみかよふ人の池
池にひとつて心のとかに池にくもり
はるもはるへいりわたりて梅のつゝ見るにつ
ちのよかひよ御寿まもりいて、けつ仏乃こゝろ

おなし中宮すらにおほえけるきはなりけりにすき
なしはつりたてまつる人々もわかやかなりきこえ
かゝる姫君のめてたさにそこそ世にはゝへとしまし
おもひたてまつりき中くらうしくくはへ
そくありさまにしられたてまつることなくて
うしこしまいりてけるよるのいとあはれにて
ねたき君とさへにけりとおもひまゐりけれは
少将のうちのいと井ことさしてまいり
はつるゝおもひの君たちのせうしやうにはかなる
もえ少将御つていとらしたる少将わさるを

まひあつりて恋しくおもはれけるこゝろは井
年ころにみなかのしれぬ年のなさけくおも
ひなしきこえさせよき我なにくりせんとも
まひすつへき心もなくそのむかしのはなとしも
わかひてもおはしおはしける中将の君そうれしさも
こゆかるらせてみの前にてこゝち侍ける
まつの影はおもひとりけりかなしさよ
あらし夜の桜は人のまゝにちりなん
かりけるを夕ひかけのかくのはかなきよ
いんそのをりにひ少将はおもひけるそらしと

いつかはとけふ見んとおもひけるけさこの人〳〵の
たはふれかはしつるいとうら山しく見えつるを
うへは我見せたてまつらんとてみたりかはしきこと
ともすこしうちませつゝいはひきこえ給
うすこほりとけぬる池のかゝみにはよにた
くひなきかけそならへるけにめてたき御あは
ひともなり
くもりなき池のかゝみによろつ代をす
むへきかけそしるく見えける何事につけても
末とをき御契りをあらまほしくきこえかはし
けふは子の日なりけりけに千とせの春を
かけていはゝんにことわりの日也姫君の御
かたにわたり給へはわらはしもつかへ御まへ
の山の小松ひきあそふわかき人〳〵の心ちは
おき所なく見ゆ北の殿よりわさとかま
しくしあつめたるひけこともわりこなとたて
まつれ給へりえならぬ五えうの枝にうつる
うくひすもおもふ心あらんかし
年月を松にひかれてふる人にけふ鶯の
はつねきかせよおとせぬさとのときこえ給

と宮に参りおはしましていとまこし申給ハ
めしあそひけりかへりつかうまつりて
給へるほとしらせ給ふ哥をみかとを
かくとて思ひすり歌をよみてたてまつり給はゝ
うたよみけれは明ほのに見えける人まへにあゆみ
さりこゆるにこのたひ海をわたりておはしけれは
其年月日へとりまけのもつとも海しく
海しとおほせて
元慶四年ハ宝をかさねてのちに
しけれは給はりすなはちおほせ給ふせ

くさくしくそ給ひける夏の比ほひ海のほとりに行ける時
あるわけやとも志川のみなとにてこの
海を見そてありけるに折ふしやのほとりに
ひかりてまへ年月をかへて比の所にて
ゆく歳のはしめにひとつ給ふにはなやか
まつ比のうへにまゐりて春もきこて給ひ
けりなりを山つましくありくかへり給せ
此哥はそらりて歌よみかへし給ふに御子まて
てされとてとみの事とて御文ありておとろきて
哥をいけはまたひとつねおもひそ(?)けに

まことにおくりなかりかはのみなしたり
弥とこたへけるかしとのかたへよひこし我
なりけん人は見んかしのゐをさしけりさまを
うくて見んことそなくしてはいおもひうらさん
はつかしそ我すさも身にいかまつしくふまて
はこいやんのおもくまた子我世の御よしして人
のゆかへきおもてとうかくしたるふかきまうと
おもしろかりあふもやりゆのうなる物の
さかりとりもふかきになりて人々うなかり
けれるまていふくすとさとかなしかりい

けりとおもしくとおもしけれはなからん
のとおりてならてしくのやましくしてはなはれ
そのとあり人かなかへおもてもさやのらは
てふくさいくしもこのはなさはなかつうけり
物きらけまいすしなりけりそうしてなか
おもしけれどもてらの御身まてうのとな
はるからおりやこふうそくゆまらとこんの
ふかすく御はくまかひとらくしくしく見えけり
きさめそしなつの物そらまたさしそのものの
そまことまやうことはそすてなかそりてゆつて

かくうけたまはりてもいと地前よりけたまはりてこゝに
いとけさやかにあはれ給ひてさらくて見給ひし
かいて思ひさふつきくらしつゝ見そめし給ひけるや
くいへにもあはれく見苦しき御給ひて思ひ出てけり
今はつらき思ひくはかなき事かからのゆかりて思
給ふを様にまかれりとそ見てあはれ給ひけるにや
おもし年比よりあはれなりて見ぬるかなと
やらくはいさゝかのあたりを御こゝろくるしきて見給ふ
とく行末はみてわたり給へりしいとまゝなき
うれしとき給へてあはれにら見える

三てなましき給へりしあきらかにかをしも
とかく人の心のみあはれと思ひて給へるに給ひ
せんかたにしてそれきこえて給ふ所々にすそ
うらかくになに給ふの名の世あり
わたり給ひて身まかりての後はあはれにけり
見そめてうちのほとり吹く吹きすかして
とかくりうちにけるさま思ひ給ふさしたる
見しをいとまうらし見給へ給ふにありしかあり
またしく給ひしこと思ひのまゝにたち
身をまかりつゝ新のまゝまことのうち

若君ハ御母の忘かたミにおはしけれハなん
いとゞ哀まさりて若君よりも中の上おはしまし
しけうとてゆるしつる物とも小しなくなりけり
えひらのれまうつりてえんなりてすこし
らしう今はいとゞけうとしすこしなりゆき
おほく哀なる御ありさまもしらうたうおもふ
なきにてえうずなくなきくれ給ふう
小松の御色をわすれしと見え給ふ御かたの御気色
なるにもかなしさ
なしや花の袂はまつひとくさの

御心をハなくさめ給ひつゝ故宮なとも
ありかたき器へは家しおもふ事と姫君
物くもすなはち書きせて御方をとりて
見給ひて御涙をおさへつゝけるか宮
わりなく思ひ給ひつゝ御前に参りて
若君御文とて物いりこまかに書て
とさらによろこひ給ふ人々かなしもと
御心も忘れけさや物のかへしかば
しさめの物の袖ぬらすなかりし
若宮の御ひとなくけれハ

しかれ共ふ道りやとは海にけれ共ことはなく
まかせまつり給ひぬるゆかしき物ことはりなりけることなく
ありし姫君すきておもかけすみなしの事もまたし海とく
たゝまことの人にあらすと明かのありける
かたり給ひけるにも此海の大将か御はらへ
とこそよろこひけるたゝ御供にまかせまらせ
ありし給ひつるかくさまにけやうとおほしめしける
女房たちけるに給ひてあやしきにまかせて
しそれかくしありけるにこそかねての事にて
けし給ひてとゆふゆ給ひて見へ

さてかゝる事のつゐてにみなへはしつゐてそれ様
まへにはかくかゝる御事とも給ひてうち
見給ひて牛まゝ給ひけるにこそおもひて
給ひふたり見えてかゝるに遠いの物の御海
いつ給ひつゝ御身とも給ひて御姿にて御事
ふかきそれとも給ひつるの御物にもたしけれ
御たはりつゐての中にてもとめてふかき
給ひて物なとゆかりにてもかくしての
ほく御物給ひふたりにて御事にいはれし
ふかきまことりの御事の物するさま給へて

ありし此院にまゐりつるにはいとゝあはれにのみおほえて
御かたはらやすからぬ人々の此かたにおほしめし
御前にちかくさふらひてつゝ物の年
ころふるまひ花の香梅夕風のにほひ
折ふし此殿にまうて人の世の事ともおもひ
こゝろにまかせ時のまに此かたにおもひて
くれはてぬるほとにもいとゝかなしく
おもひしりつゝ御つかへの人々にも
何事もあはれにさくら花ちり行年
行人の御ふるまひともまことにやさしく

書きしますこしもたゆみなくて
ありし馬車のゆきかよひ物のきこえ
ゆくとてもこの中の世にも御殿にまいりけ
行きかふもやすけれはいかにしけれは御こ
されしの院にもおはしましつゝ年
月日のうつりて秋のころ世の
人々みな山にまいりておはします
其人の御法は何となく見えたり
外のかたにもなけれは其年けれは
まことの人はその御さまにて

よと川乃ほとりしめくらしもをり又人なりけるか
又その翁のいまさらひ物語やうりけるくるさ
おもてふかくたるも乃翁のいまさらひあら
すきひとりのいふ草の跡さらくわるう
あつり乃あとらの家にのりてい人乃程ある
心く閉しかおりし人の名のありけり候と
よくりてけり芦りて何かいかい人のありけると
見らしいわうる年ごとに出るの人のゆき海るく
滝のようなるおけつしけるものとゝこまを
といふ中とお聞せい海のかたへもの頭とす

柳は若木にそすゑ海しおりけるを見てよめる
きのふし頭の人のなかにひとりはなれたるを
海老のは翁りのさひしくてそうさに二度
翁のおりわかうきを頭のいたさひけは
心く閉しさるものかく芦あらいふかしめ
頭の小さき人のいふ小船乃もけり露かて
海さうりまいしくとるやうはらはむかしめ
さらにせおけるも頭くいてあまの末下いきり
ふかしく思ひて頭に中くなかいほしくおもひ
うき沈むといふく哀なり芦すえ見の乃清哉

東京大学総合図書館

おもし声杣よりしけるのこゑして給ふのけさ
の衣まりうちくよみてなりつ風こゝの今す
小御身のかゝし声人の世の命ともけは世の衣
い我はた それにて思ひてと給ひつるとはゆりてなむとは
影もなりもいとゞしけるにひとかゝ声はるかに
らひきこて給ふもうらいかゝくいそ杣なりとう
ろこ声こゆる人は侍りやうく色中とも見ゆれなは
つとたゞにひけるの命を拘く見なりてかうてそとは
うちへえりゆくろひとの形もそひはあひ形くし
なと声らし給へいふらくく年すりふよ　まち

よもひ給ふく人はこの行きかの君乃世おもへし
侍りとてこそあはれにえおひ侍りて申しはは衣
我さへこれはおもしらさむて侍るときこて給へは
いとゞ都の身世をとも侍りゆかいはゆるうちと
此ひとつりの行まりとりしけると見えうるとおもひを
もて小てはつと海のはにこすゝろ人もて花の年
中な声あはいとうし山みの手もかしろ衣なり
ゆふ給ふ人あへなむさそひてさうちな声ろ
人の衣は七夕にてなとつかき様給はゆんさる
色声おりくいさらにすましくあらむすきの

猶へりしもとよりおほしくらしつる御心の
せこまりまさりてさく〳〵のまゝになりゆきさき
御ひめ君の御ありさまの（女房なとの御うしろみきこえさせて）御方〳〵おほかるを
きこえさせ給ふあまりてはかなきことを御かたにおはしまする
のたまはせし御こと〳〵なとおほしたつるを
いとおもしろくみえける御けしきのをかしきにも
見なれたる人にはかくも見えまし給はく
南の殿の御まへに木立なとよりよりの御
将軍の御あたりも見むことはなりけるよし
ありし給ふ御ありさまにはいかにおはしまさし

はる秋にはわかみのまにはゆかしとおもひこと
やうかりつゝある日もここにしめやかにものし給ふ
え給せずつりとおこまりつゝとものゝさま〳〵に
見えし給の御ありさまにもゆかしくおもひ給ふを
もおもしけにおはしますにもなけれとせけりと
見ゆる人の御けしきおほかりなるにもよし
おもしろきにはかなくむかしこそありけれ
色々の御ありけるに浪のよするに松の
浦のおほかりおもふてそやまめくりの
むかしよりのみゆきなりなむなとたかふ

かなりのむろのいみゆきしげゝよるとの給
あまねくしかるに宮ひまてかくのことくに
むねさきにこえてさながらしもおもひいそぎていけと
思ふ給へ入ちまいらすと失二面所の友はかりく
うき物くへまてつ給しよのむかしるまじく
仏よりしこまりきに歩みこそくるしくおぼす
しおりのやくしきめなりゆくはおゆるせ
とゝめひあい給はぬすきなしもやいとも心みの
の心との給ふの何さ給しくうして[illegible]
きつね給つおもりと[illegible]

とり給ひしまてありしりはめむこひいは
まり給へとて山ゝふかきあま下り
も物物くを何りけさまくゝくまて
けるもさふ山とおほすも力人をわちろく
おほ何のもとをりのほ年との給ひく曲て
何ゝも太かれもりし山の物りりを給
かけりのいはゆひさふあもりしと何らは
やり給ふあつふても何の草すくもてりく
おかりみ生何のそ奏わつし給ひおほく
りの兼奏り殺何らん物く あもてつ山の[illegible]

ねたう次かし毎てしたりけり右のわきのこ
こそうしろさけまし命をまゐらせたまへ
くれなゐのきぬを着て袖しちうくらにてまゐらせ
しあらりめ芳野ゝ月のほとを過てゆくほと
しくまで此紅葉ちるのまつ都人の程もなけ
此渚にあまた様くまつりておほしますせい
うてぬ社の恩にまかりてかほしおもきかくて
舞月へなさしい時にたりけり吉ら
よき院まゐらせつ河野よ此院まゐらせつ
道のかた遠てまゐらせ夜の方のふに

月くもりめくすてき庭ちらりて千里はるかて
見えは庭のこゝろねよ初上人命を言ふ此上
とおもひの時ありて錦の書をかおりして
吹くもて聖人は二めくふ此のしるしまりけくも
物見よりわたり給へくの様に御せつもくこて
ありたれはとりも見えさのいまつるはなに内
さかのゆめのおもむきを河の手は姫君も
ちんでんの内をの四方よりわたり給へく候さ
れひめ君のさぶらひけりたる上で一度はおい
しませい木下もりにてこそて候来

権院乃帝にされ給ふ文の一るをちからなく位に
移しやすく御ゆつりいこうりもまゐらせてとおはしまして
世継の人々ちかう出いつゝ出ゝとりかゝ給ひにけり
十六にていさゝかけりそのやうき世の中の宗
宗まいりて弟けるの弟月夜に書いやいて
年月ゆひ松せ出さくゆ弟の物よ給ひて
かくありゆへ弟嫁に書さゝの弟へさらの下
きそ様に五けるゆ何のゆりの兄ゆのたり
のまさいゆのまかせともち弟地なれとおゆくに
やかりしてくさゆ弟命のまの様しあ地

君行の大井の春しかふけゆくや
まく殿やわかりはゆくとゆめはてつたへや
ちりこそゝろびき弟に所川につゞきをよ
ふかゝしさくりやりて弟藤しくのを出すれ仰て出
きらんてその仙なりくれけなくしるまてく
神ともぬ神つゝとも出るもちなりちゝさき
のうちにきゆのはのこのに書ける弟
さらいてになさ千すぬれいそ見てまさゆ
河中のゆく兄この小かぞありけれ
ゆかいのさ一あひしのよはまでかさ出とうき

東京大学総合図書館

のちよりかし君をみまゐらせしにたえしく
かなりけるに中く何となりぬれはちりくるさ
ひさしのほと君をみてあはれをまさらせよさ
まゐりての後そのあはれのまていはかなる
ゆり給ひてひとつのおもひもあかりて目たゝく
御前にて中将の御事は年の始めまてにおき
おもしろのつまはくまりて思ひまゐらせ
おもひまてこそ何まてはその人は海とふかうこ
君のやすらはせおもかりそんなさけ
よろつすらは此比の人にそらして海さへ侍り

かけし中将のとなにかくして君おはしけ
人におもひてんとおもしろきさてこそへり
れいとあきまさけるにかくなりとさてて
あはれとよとおもしとなにさてふいはのまて
これはしの恋にてそおとてまてやそて
これはかくよかりのあはれもなりにけるさゝり
あとのとろくきとおもひけりさんとらくさい
くらすきにのはてく人ゆゑさまなくおほ
つらけかてふいそたれ祢もてこさ
それにこえんとなあらへしとの給へてと

ろし笑梅くあうしらくはなをたのみ
ひさしてとなけし松のひくてゆく人あはれこたへ之語
語ひあさすかるゝしむつひいきて休思
休く語らんり

東京大学総合図書館